

## シネマ日記



No. 65

○月×日 公民権運動が盛り上がりを見せていた60年代の米南部ミシシッピ州。この地では裕福な白人家庭の多くが「ヘルプ」(タイト・テイラー監督)と呼ぶ黒人のメイドたちを雇い、家事や育児を任せていた。物語は、そんな家庭環境で育った作家志望の白人娘が、ニューヨークの大学を卒業し故郷に戻って来たところから始まる。人種差別のあまりのひどさに愕然とした彼女は、身近にいるメイドたちの本音を引き出し、一冊の本にまとめようと決意するのだが、黒人女性たちは困惑し、取材に応じない。というのも、白人を批判し真実を語ることは自らの生きる場所を失うことでも

あるからだ。白人家庭ではトイレも別で、外に黒人専用トイレを置いている。そんなある日、その禁を犯したメイドが解雇されてしまう。その小さな事件をきっかけに、黒人メイドの何人かが勇気を出して、匿名を条件に、秘かに取材に応じていく。本はまとまり、町中の白人たちが読むことに。やがて、大事件へと発展していく。人種差別というシリアスな題材にもかかわらず、軽妙なタッチで、随所で笑いを誘う。心温まるヒューマンストーリーになっている。黒人メイドたちが母親代わりに白人の幼児たちを養育する愛情あふれるシーン、台所を仕切る彼女たちが作る料理のおいしそうなこと。アカデミー賞の主演、助演女優賞に三人がノミネートされ、助演の一人が受賞を果たした。

○月×日 アカデミー賞では作品、監督、主演男優など主要5賞に輝いたのが「アーティスト」(ミシェル・アザナヴィシウス監督)。歴とした仏映画だが、セリフがサイレントで、かつモノクロという異色作品。

舞台は1927年の映画製作現場。映画黄金期ながらも、サイレントからトーキーへの移行期にあつて、時代の波に流されて、人気に見放されていく往年のスターに替わり、エキストラだった新人女優がスターの座を駆け上がったいく。物語は、彼らの純愛を軸に、サイレント時代の映画作りの楽しさをじっくり見せてくれる。CGや3Dなどの新技術はいらない、映画はやはりロマンだという監督の思いが伝わる。

○月×日 抜群の「ドライブ」(ニコラス・W・レフ監督) 技術を持つ男(ライアン・コズリング)は、昼は映画の危険なスタントマン、夜は犯罪者の逃亡の手助けで暮らしている。アパートの隣の女(キャリー・マリガン)に恋をし、ひよんなことでの夫の手助けをしたことから、マフィアに追われることになる。だが、男は反撃に転じる。カーチェイスさながらに車を使った復讐が始まる。男の端正な面立ちが非情さを際立たせる。娯楽度満点のスリリングな犯罪映画だ。

○月×日 今年は米大統領選の年。オバマ対ロムニーのしびれを削る戦いが始まっているが、舞台裏は勝つためには謀略、諜報、裏切り、何でもありの手段を選ばぬモラルなき世界に違いない。「スーパー・チューズデー」正義を売った日」は、その実情を余すところなく描いて興味深い。大統領候補役にジョージ・クルーニー(監督も兼任、選挙参謀に上記コズリング)。

○月×日 「ヒューゴの不思議な発明」(マティーン・スコセッシ監督) は、孤児の少年が壊れた機械人形の部品欲しさに玩具店に盗みに入る。その店の老人は人こそ、「映画」の発明者のメリエスだった。老人は少年との交流を通じ映画草創期の夢物語に戻っていく。メルヘンチックな中に、映画へのオマージュが溢れ出る。アニメ「ももへの手紙」(沖浦啓之監督) は、父を亡くした少女が母と瀬戸内の小さな島で暮らすことになった。妖怪との不思議な出会い。少女は自立し、家族への愛の大切さにも気づき成長していく。(内藤哲